

## 朗 読 文

朝、まだ郵便局が開くか開かないかという時に、大きく口を開けた横手の門から、何十台という郵便配達あの自転車が一斉に街に出て行くのを見たことがある。自転車はおなじみの赤い自転車である。ふくらんだ黒皮の大蝦蟇口がまぐちを前に提げている。乗っているユニフォームは濃紺である。

もと郵便局と呼ばれていた麻布郵便局の、黒ずんだ石造りの建物から、五台十台二十台と吐き出され、正面の大通りを、赤と黒の噴水のように左右に分かれて流れてゆく光景は、そこだけ外国の風景画に見えた。

風の強いのが難だったが、春先にしては暖かな、見事に晴れ上がった朝であった。そのせいか赤い自転車の大群には、これから仕事に行くというより、自転車レースに出走するような弾んだものがあつた。乗手はみな競輪選手のように大げさに肩をゆすり半分ふざけているように見えたが、それは前に堤げた大蝦蟇口が重たいためだと気がついた。蝦蟇口はいずれも吞めるだけ郵便物を吞み込んで、大きく口を開けているのもある。

突然、自転車の急ブレーキが聞こえた。郵便局の右正面に黒い乗用車が急停車し、少し離れた所に赤い自転車が一台、横倒しになっている。その横に濃紺のユニフォームの人が、くの字に折れ曲がった格好で倒れていた。その人は、のろのろと仰向けに体を伸ばし、片足を曲げて二度三度馬がひづめで地面を掻くようなしぐさをしたが、そこまですで動かなくなつた。黒い乗用車の運転席から、血の気が引いて真白い顔をした中年の男が飛び下りて、倒れた人を助け起こした。

二人の後から、紙吹雪が起こつた。口を開けた大蝦蟇口から、郵便物が突風にあおられて舞い上がったのである。大判の紙吹雪は、嘘のように高く舞い上がった。うしろにつながつた車から二つ三つ警笛は聞こえたが、すべてはほとんど音のない静かな出来事であつた。

私はポカンとしながら郵便局の前に立っていた。この頃になると、反対側の車道に運ばれて行く怪我人のまわりに人垣が出来た。舞い降りて車道に散らばる郵便物を拾いに飛び出す人もあり、郵便局からも数人の職員が駆け出してきた。

ところがただ一人、私の見る限りではただ一人、そんな光景には目もくれず歩いて行く人がいた。五十がらみの女性である。ごく普通の洋服を着た、ごく普通の主婦といった感じのその人は、大声で叫びかわしている職員や人垣や、街路樹に引っかかり、落葉のように足許そくまに舞い下りてくる郵便物が全く目に入らないかのように、まっすぐ前を見つめ、ゆっくりとした歩調で六本木方面へ歩み去つた。知つていながら黙殺する、といったかたくなな後ろ姿ではなかつた。飯倉方面から救急車のサイレンが聞こえてきたが、その人はやはり振り返りもしなかつた。